

標識を立てる

災害にまつわる石碑の中には、長年の風雨にさらされて石碑の文字が判読できないものや、漢文や文語体の文字が現代人には読みにくいものもあります。石碑の内容を分かりやすくまとめた標識があれば、後世に伝えたいという先人の思いを生かすことができると考えられます。徳島県美波町と高知県須崎市の例をご紹介します。

■志和岐の安政地震津波碑（徳島県美波町）

美波町（旧由岐町）の志和岐公民館の前に、安政元年（1854）の地震津波碑が建っています。志和岐公民館はもともと志和岐小学校で、昔も今も多くの人が目にしてきた石碑です。「去ル嘉永七寅年霜月初四日朝五ツ時大地震不時ニ汐高満有此時浦中家財を寺或ハ高さ人家へ持運び翌五日七ツ時亦ハ大地震忽ち津浪押来り船網納屋不残沖中へ流れ失浦人漸寺又ハ山極へ遁登り夫々無難ニ一命助りし事全氏神諸仏社御加護也……」郷土史家や専門家でなければ、興味を持って読まれないように思われます。そこで、石碑の横の標識には、地震の後は津波が必ず来るので油断せぬように、という先人が最も伝えたかったことが記されています。〈参考資料：志和岐の安政地震津波碑と標識など〉



■恵比寿神社の南海地震記録碑（高知県須崎市）

須崎市大谷の恵比寿神社境内には、昭和21年（1946）の南海地震記録碑が建立されています。地元の河原青年団と河原われら會が昭和26年に建立したもので、裏面には、昭和南海地震の地震発生時の様子、地震後に襲来した津波の回数や被害の状況などのほか、地震及び津波時に注意すべきこととして次のことが記されています。「南海ノ大地震ニハ必ず津浪ヲ伴ウコトヲ忘レナイコト、地震直後ノ火ノ始末、小供老人ハ早く退避サスコト、衣類ソノ他必要品ハ敏速ニ持出スコト、家畜類ハ速ニ避難サスコト」。石碑の横には、もっと分かりやすく、石碑の内容を現代文に改めた標識が設置されています。〈参考資料：恵比寿神社の南海地震記録碑と標識など〉

